



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	巻頭言
Author(s)	室橋, 春光
Citation	子ども発達臨床研究, 7
Issue Date	2015-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/58511
Type	other
File Information	AA12203623_7_00.pdf



巻頭言

私たちは、本センターの基本的役割として、子どもの発達のありさまを様々な教育的事象の中に探りつつ、その背景にある社会の本質的メカニズムをみていくという研究活動があると考えている。また外部の関係領域の方々に向けた、「子ども発達臨床研究」に関わる様々なシンポジウムやセミナーなどの開催も重要な役割であると考えている。

そのような構想のもと、本年度は「子ども臨床研究部門」「子ども発達支援部門」「教職高度化研究部門」のそれぞれが、活発な活動を行った。特に、「教職高度化研究部門」は今年度発足した新しい部門であり、今後の展開が期待されるところである。

「子ども臨床研究部門」では、発達障害のある子どもたちを対象として2001年から継続してきた学習支援形態である「北大土曜教室」の最後の活動が行われ、関連するシンポジウムを開催した。また読み書き困難を主訴とする子どもたちとその親の相談を受ける「ディスレクシア外来」と、発達障害のある子どもたちを対象として造形活動を行うグループ活動が、継続的活動として実施された。さらに外部の発達障害関連職種に向けた活動として、発達障害の臨床に関わるセミナーが実施された。また教育学研究院が連携協定を締結しているNPO法人北海道学習障害児者親の会・クローバーの実施した「親のなき後の心配に関するアンケート」の実施を受けて、この結果について考えるシンポジウムを行った。

「子ども発達支援研究部門」では、これまで継続してきた「支援者困りごとワークショップ」として、「家族支援」をテーマとした講演や討論が行われた。また本年度は、本部門教員が中心となったシンポジウムなどが行われた。ひとつは「発達概念の再検討」に関わるシンポジウムで、ヴィゴツキー理論に関わる研究者として名高いロイス・ホルツマン先生をゲストにお迎えして実施された。また近年注目されている、いわゆるビッグデータを用いた研究も本部門教員を中心に始まっており、これに関連する研究会も実施された。さらに、質の高い研究を遂行するために今後重要度を増すと考えられる統計法に関わるセミナーも実施された。

「教職高度化関連部門」では、新たなメンバーとして10月に姫野完治准教授が就任され、本格的活動が開始された。今後本学においてさらに重要性が増すと考えられる教職課程に関する種々の調査が、他大学や本学を対象として実施された。また本部門の今後の展開に資するため、先行する諸大学関係者を招いて教職高度化に関するファールームも実施された。

このように、本年度は各部門において日常的活動を基礎としつつ、外部に向けた活動も活発に行われた。本年度新たに企画された催しも多かった。来年度は、「教職高度化活動部門」のさらなる展開も含めて、本センターの「基礎体力」が一層高まり、内外の研究発信拠点としての地歩を固めていくことが期待されよう。

(センター長 室橋春光)